



六  
花

4

2022

りっかはいくかい

# 父の山 ◎ 山田六甲

足よろけいずこに亀の鳴きゐるや  
薄氷の消えて櫓を逆さにす  
ブラジルのマナウスは夏さかんとか  
ご先祖の位牌拭ひぬ彼岸前  
朧かな海人の末裔なる眼  
あたたかくなれば会はうと名残雪  
春雪や米澤けふも地震ありと  
湖のごとくに黄河猫やなぎ  
石鹼玉の裏側見ゆる目を病んで

三十年もそこに来てゐる鯉幟  
白川の夜桜橋を渡りけり  
家こぼつ埃に春の雨しきり  
柳の芽柳川水路めぐるかな  
白魚を覗き込む子の虎刈りぞ  
春蘭を折り取る祖母の里帰り  
春日差し背に大仏殿を去る  
三極やこの山売ると父言へり  
うつうつと日の当たりたる雪柳  
神戸には青い山脈笑ひそむ  
雪柳束ねて少女めきにけり  
竜宮の行きも帰りも春の夢

## 初山河 ◎ 笹村 政子

城跡の坂の日陰る寒椿  
寒鴉大きな木へと移りけり  
鷹ひとつ海へ展ける棚田かな  
初日の出宿の女将に躑きゆきぬ  
梅一枝柩の父に手向けけり  
梅林や遠き牛舎の牛のこゑ  
水神の供物ぬらして若井汲む  
いつの間に夫の磨きし初鏡  
浅春の昼月雲にまぎれけり  
寂しさはさみしさとして初山河

▽寒鴉の句、表面は鴉が止まっている木よりもっと大きな樹へ飛び移っただけであるがこの事実から、過去に起きた世の中(歴史的にも)の様々な出来事や、人事が連想されて、深みを持った。読者はこの句をきっかけに過去へと連想を広げるが、それは人間の営みでもあり、国家の営みでもある。格言にいう「寄らば大樹の影」で、寄った者はその陰に安穩と暮らせるが、何時まで経っても影の存在になること請け合い。鴉は一般にずる賢いと言われている鳥の代表のようなもので、人間はときに迷惑を蒙ることがある。鴉が忌み嫌われるのは鳥葬をしていたころの名残で鴉は人の死に繋がる連想から来ているとも。一方八咫鳥は、日本神話において、神武天皇を大和の橿原まで案内したとされており、導きの神として信仰されてもいる。また、太陽の化身ともされ、様々な連想が働きロマンをもたらししてくれる魅力ある鳥でもある。

▽正月休みを宿でとった。宿の女将が初日の出が拝める佳い場所を案内してくれた。作者は宿の女将につき従って眠い眼で歩く。「躑きゆき」というところに正月の女将まかせの気楽さが漂う。

▽父上が亡くなったのは梅の花が咲くころ。俳句に季節を読み込んでおけば年月に関わらず「あの頃だったわねえ」と記憶が蘇る。これが俳句の一つの効用。俳人に日記なんていらぬ。

▽水神の供物の句。若水は、元日の朝早く酌む水。この水で年神の供物や家族の食べ物をたき、口をすすぎ、お茶などをたてる。その水を酌むとき、こともあろうに供物を濡らしてしまった。これこそ「しまった」と悔やむが、お供え物も水神様のであるから、濡れても佳いような気がする。えっダメ？

▽初鏡を覗いたら、曇っていたのが綺麗になっていた。「きつと夫が磨いたのだわ」と不思議な夫の好意への感謝。

▽初山河の句。元日であるのに気が晴れない哀しさが漂うが、それはそれとして初山河を祝おうではないか、というのである。初山河を祝い参拝すれば気も少しは晴れようか。

薄氷 ◎ 志方 章子

冬晴や鳥と思へば飛行機よ

冬晴は真に淋しきものならむ

閉門の寺に鮮やか冬紅葉

制帽に凜々しき車掌冬の朝

面々のマスクをかしき祝賀会

日に透けしいろは紅葉の悪魔的

その下を魚過ぎゆく薄氷

鷹匠は若き女や腕知らず

何もかも忘れたきかな柚子湯して

暮早し孤独の時間はじまりぬ

▽**章子**は体調不良であったようだ。しかし検査などしながらも俳句を詠むのを欠かさないのはさすが。

▽**冬晴れ**の句。あまりにも晴れ過ぎると空気がピンと張り、神経が立つて、夫を亡くした気持ちに蘇り、淋しさが募る。それは本当に淋しいものだ、というのであろう。章子にとって却って霧のかかったような天気の方がいいのかも。

▽**寺門**が閉ざされて、今日はもう紅葉を楽しめない、と思うほどに紅葉の美しい景色見たさがつゆる。そういうのを普通未練というのだけれど人は未練に恋する動物でもある。未練のない情なんて面白くもなんともないが、未練にのたうち回ってこそ、美しいと感じる矛盾した生き物なのである。

▽**制帽**の句。制服、制帽というのは、章子の言うように凛々しさを感じさせる。電車の車掌が烏打帽や麦わら帽子では締まりがない。制服、制帽は人を凛とさせる効用があると気づいた面白い視点である。

▽**日に透けし**の句。紅葉は逆光で見ると美しく感じる。太陽が背にあるその美しさは仏の光背のようながら「悪魔的」と表現したのは詩的。あまりに美しいと、なんだか悪魔的に感じるのも心理。悪魔的とは自らの内部に潜む悪魔を呼び起こされそうになり、怖いのだ。悪魔になるのを恐れていたイヴが食べてしまった無花果は美味しかった。何でも腐る一步手前が美味しいから、果物も、チーズも、鯛の刺身も桃も腐る一步手前でむさぼり食うのが実に悪魔の味なのである。「あなたも腐りなさい、西施もクレオパトラも腐りかけた美貌を備えていたのですよ」と悪魔の囁き。

▽**薄氷**は春の季語。薄氷のよろしさは、踏めは簡単に割れること。踏んでも割れない氷は靴の泥が着いて美しくもなんともない。絶世の美女は踏まなくても近づいただけで割れる。大阪や奈良にはそういう女性が存在する……。加古川にも。

▽**鷹匠**に最近では女性が増えた。その女性の鷹匠は果たして腕前の方はどうなのだろうと章子は値踏みをしている。

傘寿 ◎ 升田ヤス子

初鏡曙光にひらく紅ケース  
この寺の刀自の愛でゐる冬椿  
笹子鳴く狭庭の隅の大音声  
棒鱈のはだかを買ひぬ年の市  
石切場曝されてゐて山眠る  
寒牡丹見返り仏となりにけり  
客蒲団干すや四日の日の光  
祝はれて傘寿の金のちやんちやんこ  
鳥声の力春待つ沼の縁  
春陰や逆さ櫓の曇りぐせ

▽この寺の句。刀自（とじ）とは、「日本国語大辞典」によると、「〔戸主（とぬし）〕の意で、「刀自」はあて字らしい。家の内の仕事をつかさどる者をいう。①家事をつかさどる婦人。主婦。いえとうじ」と。その女性が植えている冬椿の咲いたのを綺麗だなあと愛でているのである。椿は首が落ちるに通じるのを嫌い近江の武家では植えなかった。しかし寺ではそれを弔うことが自前で出来るから椿を植えるのであるのか。冬椿は一見山茶花のようであるがそうでないらしい。やまぢやばなともいうらしいから、新葉を揉んでお茶として飲めるかも知れない。

▽笹子鳴くの句。升田邸の庭に来て笹子が鳴いた、戸外や公園などで聞く笹子と違って、庭で鳴いたら驚くほど大きな声であった。変な例えかもしれないが、家電店で見たテレビが家に届いたら思い描いていた大きさと違い、「こんなに大きかった？」と驚いたのだろう。笹子とは「ささこ【笹子・鶯子】で中冬のころ巣立ちする鶯（うぐいす）の子」と説明する辞典もあるが鶯は夏山に上り、冬場は里に下って来る、という書もある。

▽石切り場の句。兵庫県高砂市では石の宝殿が名高いが、その山は岩山で竜山（たつやま）石が産出。御影石のような硬さはないが石段などの加工にむいており用途は広い。その石切り場には樹木がなく、作者の言うように寒さの中で曝されている状態。そこを寒々と詠んだ主観写生の句。夢風撰候補。

▽寒牡丹の句。見返り仏というのは永観堂の仏らしい。「見返り美人」という切手で有名な日本画もあり、なにかありそうな魅力。

▽傘寿の句。ヤス子も傘寿を祝われる年齢に達した。人生五十年の昔はこれ以上の喜びはない、金色だとランクされた年齢になったのだ。作者は複雑ながら嬉しい人生の区切りであろう。次は百歳を目指す。

▽春陰の句。春は空模様がとかく曇りがちであることを春陰という。明石城が整地されて、櫓が映りみえるようになったその景色を詠んだもの。作者は空模様を水に映つたやぐらを介して春の天候を捉えている。夢風撰候補。

きぬぎぬ ◎ 善野 行

あたたかな表紙の日記買ひにけり  
青空やなんきんはぜの実の万朶  
片時雨坂にもつるる左脚  
煤逃の人を諭して帰しけり  
荒庭の俄か手入や年用意  
きぬぎぬや昔男の初鏡  
有為のこの世を覗きけり初鏡  
うつつへと夢のかけ橋初鏡  
火を守りて三日の夜明け遠くあり  
日脚伸ぶ夕べの雲の頼もしく

▽**きぬぎぬ**の句。きぬぎぬ「後朝（きぬぎぬ）」とは。衣を重ねて掛けて共寝をした男女が、翌朝別れるときそれぞれ身につける、その衣」（国語辞典）昔男とは「在原の業平」を連想させ、掲句は大晦日に泊まりに来た色男が帰る際に鏡で乱れた髪を調べているところ。大晦日から男女は交わり男が初鏡で髪のを調べている場面である。これは事実ではなく、希望的妄想の句だと思いが、男にとって実に羨ましい光景。奥方は、明けましておめでとうございます、と三つ指をつけて皮肉な祝辞を述べる。

▽**日記買ふ**の句。温かいデザインの表紙の日記を選んで買った。来年は穏やかな一年であることを願って表紙を選んだのであろう。様々な願いのもとに選ぶのだが、三年五年十年などとは言わずとも、楽しい一年にしようという気持ちで嬉しい。

▽**片時雨**の句。片時雨とは一方で時雨ながら一方では晴れているような冬の天気。天も寒くて落ちつかない状態。坂がかりのとき左足がもつれた。左足がもつれるのは右脳に異常をきたしているのにちがいない。右脳が弱ると何か堅苦しき感情が勝る。これでは楽しくないから、一杯ひっかけて左右の脳を柔らかくしようと思うのである。夢風撰候補。

▽**煤逃げ**とは年末清掃や年用意の最中こっそりと抜け出して来た人。私にも覚えがある。しかし、煤逃げを論されるようなことはなかった。ウソが巧いのだ。俳人は煤逃げをして句を詠みに出る。「煤逃げを弟子に諭されかえりけり ろく」。

▽**有為**の句。「有為とは、私たちが生死しているこの世のことだが、仏教では「迷いの世界」だと見る。

この世は先き行き不安定で暗迷な世界」ということは鏡を覗き込んで、ふと有為（うい）の世界を覗き込んだ状態で、ふと我に帰る。

▽**火を守る**の句。村の役目で正月三日間神社の火の番を担当。一日二日はなんとなく過ごせるが三日目には役目を解放される時刻が早く近づいて欲しいから、なかなか時間が経たないのであろう。

## 去年今年 ◎ 住田千代子

千両の実の散らかれる生花店  
右ひだり振り子の幅や去年今年  
お年玉姉妹の膝の小さきかな  
お誘ひの時間せまりし初鏡  
嫁が君尾の躰きに琴鳴れり  
吹きこぼる七草粥に野の匂ひ  
恙なく生きてこの方粥柱  
賽銭の音のきらめく初戎  
福笹に億円札のよぢれあり  
初恵比須竜宮城へ来しここに

▽正月花を商った生花店に千両の実が散らばっている状態に年末の忙しさが見える。千両の実が可愛そうだと思ふのは俳人か詩人。店がそれで儲かったわけではないが、客は実を損しているのであるという視点が面白い。

▽去年今年の句。季題・季語を熟知して句が詠めるのは力量である。

▽お年玉を貰う姉妹がきちんと膝をそろえて実に可愛い。私は逆で、この年になると孫や子からお年玉を貰う。膝をきちんとそろえ小さくなって押し頂く。だが猫ちゃんはだまっても三つ指を突いてじっと待っている。

▽嫁が君は正月の鼠。嫁が君（よめがきみ）とはネズミの別名。特に正月三が日に忌み詞（ことば）として使う。可愛らしく言えば鼠も「チュウくらいなりおらが春」と言ってくれるか。正月は餅を曳けるので嬉しいのであろう。そのほか正月の家庭風景を自在に詠んでいるのが佳い。

▽七種には粥を炊く。その吹きこぼれた粥から野の匂いがしたと詠んだのが眼目。夢風撰候補

▽恙なく生きてきて七草粥を囓れるのも有難いことであるよと幸せをかみしめて粥を炊く。

▽賽銭を投げたらどんな音がしたのか知らないが、きつと音はしなかったのだと思う。札束のボソソと音がしたかもしれない。初エビスは一月二〇日。恵比寿様は漁業の神で、西宮に祀られているが、本当は淡路島の岩屋であるという。弁慶の硯がある神社は面白いことに、賽銭箱に左大臣、右大臣と書かれた箱が並べてある。理由はまだ調べてない。

▽福笹の句。「一億円」のと派手なお札を笹にむすんであり、余りにも額が大きくて実感が湧かないのがよろしい。

寒鴉大きな木へと移りけり 笹村 政子

今、鴉が留っている木から、もっと大きな樹へ飛び移っただけであるが、過去に鴉に起きた様々な出来事や、人事が連想されて、深みを持った。読者はこの句をきっかけに過去へと連想を広げる。それは人間社会の営みであり、国家の営みまでも。ことわざに言う「寄らば大樹の影」で、寄ったものはその（陰）比護に安穩と暮らせるが、何時まで経ってもカゲの存在に終わること請け合い。鴉は一般にずる賢いと言われている鳥の代表のようなもので、人間はときに迷惑を蒙ることもある。鴉が忌み嫌われるのは昔、人が鳥葬をしていたころの名残で鴉は人の死に繋がる連想から来ているとも。一方八咫鳥は、「日本神話」において、神武天皇を大和の橿原まで案内したとされており、導きの神として信仰されてもいる。また、太陽の化身ともされるし様々な連想が働きロマンをもたらししてくれる、魅力ある鳥でもある。（六甲）